

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：34402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370188

研究課題名(和文)「赤いウィーン」における音楽政策とモダニズムとの関係

研究課題名(英文)Musical Policy and Modernism in 'Red Vienna'

研究代表者

西村 理 (NISHIMURA, OSAMU)

大阪音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：00552738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第1次世界大戦後、オーストリアの首都で社会民主党が勢力をもっていた時代(1918年～1934年)、いわゆる「赤いウィーン」における音楽文化を考察した。まず1924年10月から始まったラジオ放送は音楽文化を考える上で重要であるため、音楽番組の整理を行った。次にシューベルト没後100年を、ウィーンの諸芸術のモダニズムの特徴およびオーストリア社会民主党の音楽政策との関係から考察した。

研究成果の概要(英文)：This research treats the musical culture in the capital of Austria from 1918 to 1934, which was called 'Red Vienna' at that time, due to the Social Democratic Party's strong influence. First, the music programs of radio broadcasting, that had started in 1924 and is considered as being crucial to the musical culture, were analyzed. Next, the centenary of composer Franz Schubert was examined regarding the relation between Viennese Modernism and the Social Democratic Party's musical policy.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽政策 ラジオ放送 シューベルト没後100年

1. 研究開始当初の背景

(1) D. J. バッハが果たした役割

第1次世界大戦後、ハプスブルク帝国が崩壊し、オーストリアは共和国となった。共和国では当初、オーストリア社会民主党が与党となったが、キリスト教社会党との対立のなかで、オーストリア全体のなかで主導権を持っていたわけではなかった。その一方で、首都ウィーンではオーストリア社会民主党は1934年にドルフス政権下で活動を中止されるまで勢力を維持し続けた。「赤いウィーン」と呼ばれるこの時代に、ダーフィット・ヨーゼフ・バッハ David Josef Bach (1847~1947) はオーストリア社会民主党の芸術部局 (Kunststelle) の局長を務め、ウィーンの音楽文化に重要な役割を果たした。バッハはドイツ的な教養を労働者に身に付けさせることを重視すると同時に、マーラーや彼の友人たちの音楽、つまりウィーンのモダニズムを代表する新ウィーン楽派 (シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルン) の音楽を労働者に広めようとした。

(2) 着想に至った経緯

研究代表者は、博士論文で「新ウィーン楽派」概念の成立を扱ったが、その際に、オーストリア社会民主党が中心的な役割を担った1924年と1927年の音楽祭が、「新ウィーン楽派」概念の成立に大きく寄与した可能性を示唆した。その後、2009年度および2010年度のローム ミュージック ファンデーションの音楽研究助成によって、新ウィーン楽派の精神的な支柱であったマーラーの交響曲演奏とオーストリア社会民主党の音楽政策との関係について扱った。その結果、オーストリア社会民主党の音楽政策がモダニズムとどのような関係にあったのかを詳細に検討する必要があると考えた。

オーストリア社会民主党の音楽政策に関しては、Kotlan-Werner (1977年) や Seidl (1989年) の著作で論じられてきたが、2000

年代になって再び注目されはじめ、Koehler (2006年) や Kinnett (2009年) の博士論文でも取り上げられている。このように近年、研究が活発化しつつあるオーストリア社会民主党の音楽政策についての研究であるが、音楽以外の芸術政策との関係を視野にいれた研究はない。そこで、本研究では、オーストリア社会民主党が発行していた新聞や雑誌における記事を網羅的に調査し、その解説を通じて同党の音楽政策の実情を明らかにし、音楽政策が芸術政策全体のなかでどのような位置づけることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、労働者にとって受け入れ難いと思われる新ウィーン楽派の音楽を広めようとしたオーストリア社会民主党の音楽政策の実情を同党が発行していた新聞や雑誌および同時代の他の新聞や雑誌での記事の解説を通して明らかにし、当時のウィーンの音楽文化のなかで考察すること、そして同党の音楽以外の芸術政策のなかに位置づけることにある。

3. 研究の方法

(1) 資料調査とデータベース化

①オーストリア社会民主党の音楽政策の実情を明らかにするために、まず同党が発行していた新聞や雑誌——『Arbeiter-Zeitung』『Kunst und Volk』『Der Kampf』『Bildungsarbeit』——における音楽関連の記事を収集し、データベース化を行う。次に、それらの記事に関わる記事を、『Neue Freie Presse』『Der Abend』『Neues Wiener Journal』『Die Stunde』『Moderne Welt』などの一般新聞や雑誌で調査する。

②オーストリア社会民主党が関わっていたコンサートや音楽祭に関する資料調査を行う。同党が主催のコンサートシリーズ「労働者交響楽演奏会」、1924年の「ウィーン音楽・演劇祭」およびシェーンベルクの生誕50年、1927年のベートーヴェン没後100年祭および1928年のシューベルト没後100年祭のプログラムや関連資料を収集する。

(2) オーストリア社会民主党の音楽政策の位置づけ

資料調査とデータベース化を踏まえて、考察対象を絞り込み、オーストリア社会民主党の音楽政策をウィーンの音楽文化や同党の音

楽以外の芸術政策との比較を行う。その際に、世紀末からの諸芸術のモダニズムとの関係にも注意する。

4. 研究成果

オーストリア社会民主党が発行した新聞や雑誌における音楽関連記事を収集し、データベース化を行った。その過程で、ラジオ放送での音楽番組の可能性に関する記事や「労働者交響楽演奏会」のラジオ放送に関する記事が見つかった。研究開始当初の段階では、1924年10月から RAVAG によって開始されたラジオ放送が、オーストリア社会民主党の音楽政策との関連は予想していなかった。しかし、「赤いウィーン」における音楽文化においてラジオ放送が担った役割を検討することは、本研究において不可欠であると考え、オーストリアの放送局 RAVAG の音楽番組について、機関誌『Radio-Wien』に掲載されている番組表に基づいて調査を行った。

オーストリア社会民主党は、モダニズム音楽と並んで、ウィーンで活躍した大作曲家ベートーヴェンとシューベルトも重視していた。「赤いウィーン」の時期には、1927年のベートーヴェン没後100年と1928年のシューベルト没後100年があり、いずれの記念祭にも、オーストリア社会民主党は深く関わっていたため、両記念祭についての資料調査を行った。

オーストリア社会民主党の音楽政策とラジオ放送、モダニズムについて研究を進めた結果として、シューベルト没後100年の1928年が、オーストリア社会民主党の音楽政策において興味深い年であることが明らかになった。モダニズムは通常、過去と断絶する傾向にあるが、19世紀末から20世紀のウィーンにおける造形芸術のモダニズムにみられるのは、19世紀初頭の市民の日常生活様式であるビーダーマイアーへの郷愁であった。それに対応して音楽におけるモダニズムにおいては、ビーダーマイアーを象徴する作曲家シューベルトが重要な人物となった。シュー

ベルトは、D. J. バッハの音楽政策の中心的な概念である「人気 Volkstümlichkeit」とも結びつく。しかし、シューベルトは、オーストリア社会民主党と対立関係にあった、キリスト教社会党にとっても重要であった。

両党から重視されたシューベルトの没後100年に、ウィーンではシューベルトに関連する3つの音楽祭——第10回ドイツ合唱同盟祭、オーストリア連邦政府とウィーン市が別々に主催するシューベルト没後100年祭——が開催された。第10回ドイツ合唱同盟祭はドイツ・ナショナリズムと密接に結び付き、そのなかでシューベルトは位置づけられていた。社会民主党が政権を担うウィーン市主催のシューベルト没後100年祭では、合唱曲を中心に据えているため、ドイツ合唱同盟祭と同じ傾向にあった。一方、キリスト教社会党が政権を担うオーストリア連邦政府主催のシューベルト没後100年祭では、合唱曲以外のジャンルも扱い、シューベルトがドイツとならぶオーストリアの国の大作曲家として位置づけられていた。

RAVAG でのシューベルトに関連する番組には、シューベルトが作曲したジャンルを幅広く扱うだけでなく、テーマを設定した番組、伝記的な内容を扱った講演もあり、シューベルト創作全体を紹介している。そうした枠組みのなかに政治的な意図をもつ3つの音楽祭も組み入れられている。ただしラジオ放送のなかでは、いずれの政治的な意図に偏ることなく対等に扱っている。オーストリア市は RAVAG に多く出資しているため、オーストリア社会民主党の議員が、シューベルトの貧しさを語り、プロレタリアートとして位置付けるような番組にするように要求したものの、決定権は RAVAG にあり、要求は通らなかった。RAVAG は、シューベルト没後100年をヨーロッパの「相互の尊敬と理解の新しい時代」と結びつけ、シューベルトをヨーロッパ各国の調和の象徴として位置付け

た。本研究によって、シューベルトの没後 100 年におけるラジオ放送の意義が明らかになった。この成果を紀要論文で公表した。

当初予定していなかったラジオ放送の音楽番組を調査が加わることで、オーストリア社会民主党の音楽政策とモダニズムとの関係については、十分な考察が行えなかったため、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

西村 理「1928 年ウィーンにおけるシューベルト没後 100 年——3 つの音楽祭とラジオ番組を中心に——」『大阪音楽大学研究紀要』第 55 巻、2017 年、5～21 頁 (査読有)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 理 (NISHIMURA, OSAMU)

大阪音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：00552738